いえ

字　統　　白川　静

家

説文

甲骨

金文

解説：会意
宀（ﾍﾞﾝ）と豕（ｼ）とを組み合わせた形。家を示す宀（建物の屋根の形）の下に、犠牲（いけにえ）として殺された犬を加える。家とは先祖を祭る神聖な建物である廟（みたまや）のことである。そのような建物を建てるときには、先ず犠牲を埋めて、その土地の神が怒らないように鎮めるために地鎮祭を行うのである。古い字形では、犬は殺されたものとして、尾を垂れた形に書かれている。今の字形では宀の下が豕（豚）であるため、昔は人も豚も同じ屋根の下にいっしょに住んだのであるなどと説明されていた。甲骨文字や金文の字形によって、宀の下は犬であり、建築の前に奠基（てんき）（地鎮）として埋められたものであることが明らかとなってきた。家はもとは先祖を祭る廟であるが、これを中心として家族が住んだので、人の住む「いえ、住居」の意味となった。家族によって家柄が構成されるので、住居としての建物の意味だけではなく、家族・氏族のあり方を含めて家という。

屋

説文

解説：会意
尸（ｼ）と至を組み合わせた形。尸は尸（ｶﾀｼﾛ）（先祖の霊の代わりに祀られる者）であるとする説もあるが、屋根の形であろう。至は一の上に逆さまの矢の形をかき、放たれた矢が到達するところをいう。屋は殯（ｶﾘﾓｶﾞﾘ）（本葬する前に、しばらくの間遺体を棺に納めて安置すること）の建物で、その建物の場所は神聖な矢を放って占い、その矢の落ちた地が選ばれた。屋で死体を風化させてから本葬する形式を複葬という。屋はもとの殯のために使う板屋（ﾊﾞﾝｵｸ）（板で囲って建てた家）であったが、のち一般の「いえ、やしき、すまい」の意味となる。

室

説文 甲骨

金文

解説：会意
宀（ﾍﾞﾝ）と至とを組み合わせた形。宀は先祖の祖先の霊を祭る廟（ﾐﾀﾏﾔ）の屋根の形。重要な建物を建てるときには、まず土地の選定をするが、予定の所に神聖なものとされた矢を放ち、矢の到達した地点を建築場所と定めた。至は矢の逆さまの形と一とを組み合わせた形で、矢の到達した地点を示す。そこに先祖を祭る建物を建築するのである。室はもと祖先を祭る「へや」の意味であったが、のち人の住む「へや、いえ」の意味となり、家の人すべて、一家、家族の意味になた。屋・臺（台）はいずれも至の形を含むが、同じように矢を放って建築場所を選定して建てた建物である。国語では「むろ」とよみ、氷室のようにいう。

舍

説文 金文

解説：会意
もとの字は舍に作り、干と口とを組み合わせた形。干は把手（ﾄｯﾃ）のついた長い針の形。口は∪（ｻｲ）で、神への祈りの文である祝詞（ﾉﾘﾄ）を入れる器の形。害（ｿｺﾅｳ）と同じように、長い針で∪を突き刺し、祈りの働きを傷つけ、祈りの効果を捨てさせることを舍という。舍は「すてる」の意味となり、捨てるのもとの字である。常用漢字の字形は害・舍で、針の先を折って∪に届いていないから、∪を傷つけて損なうことも捨てることもできなくなっている。金文では「舍く（おく）」とよみ、「舍ふ（あたふ）」という用法もあり、それから「やどる、やどり、いえ」の意味となったのであろう。

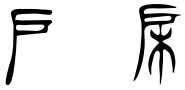
宅

説文

甲骨 金文

解説：形声
音符は　。　は[説文]に先端が伸びて者に寄りかかる草の葉の形であるとするが、宅・亳（ﾊｸ）・託などの字からすると、草の葉による占いの方法を示す字であろう。託は神の仰せを聞くの意味であり、宅は建物を建てるとき、神意を聞く方法を示す字であろう。宀（ﾍﾞﾝ）は先祖を祭る廟（ﾐﾀﾏﾔ）の屋根の形。甲骨文に「三帚（ｻﾝﾌﾞ）（婦）は新寢（しんしん）（廟）」に宅（を）らんか」とあり、これは、これは廟の中で神託（神のお告げ）を求め、神意を受けるという意味であろう。それで宅はもと神意のあるところ、神聖なもののおるところという意味であろう。のち人のおるところをいい、「おる、すむ、すまい、やしき」の意味に用いる。

戸

説文  甲骨

門

説文 甲骨

金文